

●心の触れ合い基本に

川南町中心部を「トロントロン」という。この優しい響きの地名の由来をたどると、「参勤交代のときの大名行列の休息の水」「西南の役で敗走する西郷軍の渴きを癒やした」などの諸説がある。いずれにせよ、時代を超えて、この地が道行く人々の渴きを潤したということは事実であろう。

このトロントロンに今、新しい文化の息吹が生まれようとしている。「モーツァルト祭」である。クリスマス・イブにかけて、町立の文化ホール「トロントロン・ドーム」に日本青少年モーツァルト管弦楽団（本拠地・千葉市）の冬季合宿を招き、地元との交流と演奏会を五日間にわたって開く。昨年で二回目。

祭りの仕掛け人は町内在住の住職多賀学昭さん。クリスマスにモーツァルトを楽しもうという、自由で、おおらかな発想で、県の「アート

キャンプみやぎき推進事業」を活用して、二〇〇一（平成十三）年、初めて実施。地元住民と都会から来た若い楽団員は、音楽や自然を介して交流を深め、祭りは大好評。イチゴ温室から演奏会場へ直接足を運ぶ町民もいた。

川南町は「川南合衆国」とも言われ、開拓地としての歴史を持つ。そのことを視覚的に理解する絶好の場所の一つに、川南町管牧場がある。国道10号を西に入り、尾鈴山のふもとの台地にある牧場は、一九六六（昭和四十一）年に畜産振興を目的に町が設置した。ここに立つと、日向灘の青を背景に、斜面をゆっくり移動しながら緑を食べる乳牛などがいて、宮崎では珍しい牧歌的な風景に触れることができる。「モーツァルト祭」で訪れた音楽家は、「アルプスのホルンを響かせてみたい。そんな印象がするところ」とたたえた。



モーツァルト祭。音楽を通して新しい文化の息吹が生まれる

牧場の眼下には碁盤の目のように整然と区画された農地が広がる。藩政時代以来の開拓による産業振興のアイデアが、時を経て、戦後復興政策で青森・三本木、福島・白河矢吹と並ぶ国内三大開拓地となった。ここは第二次世界大戦中、空挺（落下傘）部隊があったところで、広大な軍用地が農地として切り開かれ、開拓移民は、全国四十七道府県すべてから定着した。全国からの開拓者によって築かれた「川南合衆国」。ここに新しく誕生した「モーツァルト祭」が今再び、全国から人を呼ぶ吸引力になりえるかどうか。心の触れ合いを基本にした音楽祭に、町民の熱い期待が集まっている。

河野 誠